# 議事概要（令和３年度愛知県陶磁美術館運営会議）

委　員：事業報告を伺い、いろいろ実施されていると思った。美術館部分に加え陶芸館でもクーポン対応を進めた点はよい。コロナ禍の中、県内小中学校の修学旅行が遠方から近隣に変更されている。学校の先生や旅行会社が企画するにあたり、県内各所を候補に検討されるが、陶磁美術館のことはあまり知られていない。多くの人数を受け入れるためには、学校や旅行会社への働きかけが必要である。館外への情報発信においては、SNS の活用や、ユーチューブの活用、インターネット予約など取り組んでいる。こうしたことは必須と思う。動画等で館の独自性を発信したり、商業施設へ出向くことも進めていただきたい。

座　長：評価いただきありがたいが、まだまだ改善途中である。来館者が嫌だなと思う部分なくすようにしていきたい。現在は、館内のわかりにくい看板を、嫌だなを無くし、魅力が伝えられるものへと表示改善に取り組んでいる。

委　員：コロナ禍の中で、小中学校では修学旅行等は県外から県内となった。県内候補地を検討すると、旅行会社から知多や犬山が紹介される。陶磁美術館近隣となるとモリコロパークまでになる。行程を考えた際、施設単独では難しいため、複数の施設と組んでコースを企画するとよい。

委　員：西館のこま犬を本館へ移設することは、極めてシンボリックな取り組みだと思う。こま犬の熱烈なファンもいるので、誘客という意味では、単発の催しではなくこま犬でコラボする催しもあるとよい。瀬戸市としても、来年10月開園するジブリパークの利用者をこちらへ引っ張ってくる企画テーマが必要と考えている。瀬戸、多治見、美濃、志段味の古墳との連携などを考えてはどうか。SNS 発信は効果的であると思うので、フォロワー数増などの目標値を高めて重点的に取り組むことも重要である。常滑と瀬戸が六古窯に入るのでオンライン開催で六古窯サミットを陶磁美術館で来年10月にできないか考えているので、今後相談させてほしい。

委　員：常滑陶芸協会は市内だけで催しており、縮小傾向にある。瀬戸、美濃などと連携して、ギャラリーで交流展として催しができたらと思う。

座　長：「第 51 回東海伝統工芸展」は、新型コロナウイルスの影響で名古屋市内開催予定であったものが中止となり、当館の展示室を貸して開催できたものである。コロナ禍だからこそ、当館でできるものもあると思うので、何かあれば情報提供等、ご支援いただきたい。

委　員：岐阜県現代陶芸美術館でも、利用者が増えないなど同じ悩みがあり試行錯誤している。年齢層は50～70歳代が中心なので、次の世代に関心をもってもらうことが必要で、多治見市では「やくならマグカップも」というアニメを製作し、聖地巡礼化を図ったところ、市内訪問が増えてきている状況がある。企画において、他地域との交流もできたらと思う。

委　員：瀬戸市内で展覧会をやっても常連の方が多く、それ以上増えない状況であるので、合同での展覧会が行えればよいと思う。SNSは、10～40代向けに見やすいものとして発信していただきたい。また、陶芸館では、中学生や高校生に興味をもってもらえるような催物が望ましい。難しいと思うが、長期的に次世代のファンを増やすことを目標に取り組んでいただきたい。

委　員：図工の授業時間が2時間から1時間に減って、小学校ではやきものをやらなくなった。ただ、やきものは子供が喜ぶし、特別支援学校の生徒の学習には大いに役立つものだと考えている。来館した生徒には、作品の「見方」がわかるようにするとか、クイズ方式にするなど、興味を引くような説明があるとよい。

委　員：県内には、若い人が訪れることで、10年で観光人数が３倍になった箇所が３か所ある。日間賀島、佐久島、犬山である。やきものにおいても猫が女性に人気である。人気あるものから呼び込む導線があるとよい。こういったものから入るのも手法の１つと思う。

委　員：常滑市でも、常滑を舞台としたアニメ映画「泣きたい私は猫をかぶる」で聖地巡礼化し、訪れる人が増えた。

委　員：西館については、本多氏から開館当初に展示方法の指導をいただいた。西館の猿投窯研究施設としての活用には賛成である。西館は、展示と調査研究がミックスできるような施設にしていただきたい。こま犬の本館１階ロビーでの展示の置き方はしっかり考える必要がある。

委　員：灰釉蕨手唐草文手付水注の購入費用について、再度説明していただけないか。

事務局：通常は、美術品等購入基金による購入となるが、今回はこれとは別の、個人の寄附で購入したものである。陶磁文化のために役立ててほしいという意向のもと寄附を受けたため、これを原資として購入した。

委　員：コロナ禍、及びポストコロナの環境で、何が求められているかを考えてい

くべきである。ジブリパーク来園者は、時間いっぱい使って帰ると思われ、その来園者が陶磁美術館に来て来館者が増えるとはあまり考えない方がよい。陶磁美術館としてはコンテンツそのものが重要で、その核は猿投窯だと思う。猿投窯で西館を活用するのは賛成である。なお、レストランを利用した際に、紙皿で料理が出てきたという話を聞いた。陶磁器の美術館で紙皿はいかがかと思う。経営状況もあろうが、来館者に向けてこういった点も大事にしていくべきなので点検してほしい。

座　長：当館は年間 10 万人を目標にしているが、レストラン業者も本来そのくらい来館されないと厳しい営業状況である。現状も踏まえて検討していきたい。

委　員：現代美術の業界においては、異業種からの依頼が多い。イノベーションを生むには異業種とのコラボも必要である。「何がおきるかわからないがやってみる」というのもよいと思う。例えば、アートブックと陶器、楽器と陶器、おもちゃ・ゲーム・アニメと陶器など。陶芸を見に来なかった方々と組むことで、あらためて陶芸の良さが見えてくるかもしれない。愛知県は理工系のエンジニアが多いので、連携してバーチャル陶器で遠方の方でも触られるようなことを考えると、話題性も出てくるのではないか。

委　員：美術品の展示や年表に、子供たちに興味をもてるような説明があるとよい。桃山時代はこのような背景でこのような作品であるということを、映像等で見せたり子供に想像させられるような取り組みがあるとよい。そうしないと生徒は作品の前を通り過ぎるだけになる。

委　員：来年度の国際芸術祭、ジブリパーク開園を横目で見る手はない。２つの山が来る機会をものにできればと思う。現在、愛知県美術館でジブリ大博覧会を開催しているので、客層などを調査するのも、陶磁美術館として知恵を絞っていく１つのきっかけになるのではないか。また、ジブリのコンテンツでは動物がよく出てくるので、猫やこま犬を含めて活用するのも１案である。親も子も興味を持つようなものを考えてもらえたらと思う。ジブリのプロデューサーは発信力があるので、何かコラボを考えるとよいのではないか。

座　長：いろいろ貴重なご意見をありがとうございます。県内居住者で愛知県陶磁美術館のことを知らないという方が意外に多いので、もっと興味をもってもらえるよう魅力を高めていきたいと思う。本日は活発な御審議をありがとうございました。